




---

 巻 頭 言
 

---

## 論理とフィーリング

米 花 稔†

MIS という用語がもうあまりもてはやされなくなった今日、かえってデータ・バンクへの試み、そのためのデータ・ベースの整備、そのほりさげなど、次第に地味な努力が、積みかさねられているようである。これらの試みは、いま二つの方向で、情報を利用するものにとって役立ってゆくことと思う。

その第一は、もちろん徐々にではあっても、その進展にともなって、情報の蓄積、検索を、より容易にするという本来の目標の方向であって、いうまでもないことであるが、その範囲はまだそれほどのひろがりとはいえない。その意味では差しあたりは、第二の方向での役立ちにより以上に期待したいのである。意味するところは、コンピュータの処理システムにのり、のらないはとにかくとして、文字通りデータ・ベースを手がかりに、情報にかかわる諸問題が解明せられ、情報を整備する考え方、すじ道が明らかになることによって、その体系化が促進せられ、既にこの段階で、情報を利用するものにとっての貢献は、きわめて大きいものが広くもたらされるであろうと期待せられる点である。いいかえると、コンピュータ自体の貢献もさることながら、コンピュータなりその延長線をめぐって展開する論理の貢献が、すくなくないであろうという点である。その意味で、これらデータ・バンク、データ・ベースなどの諸研究にたずさわっている方々の貢献は、その成果が容易に具体化しない段階においても、すくなくないと評価しなければならないと思う。

このような考え方を推しすすめると、筆者のように社会科学の分野に属しているものにとっては、今広義の社会的な諸事象について、情報化せられたものと、情報化されていないものとの接点の問題に、すくなくない関心をもたないわけにいかないのである。このことは、最近の価値観の転換とか、多様化といわれ、ま

た数量化せられたものより数量化せられない質的なものの重視などが、今日あらゆる分野で議論せられていることと関連する。現在既に情報化せられている範囲においても、それを情報システムとして体系的に把握することに、うえにみたようになお多くの課題がある段階ではあるが、より以上に、なお情報化されていない諸事象の情報化がまた欠くことのできない問題となっているという点である。

その意味で、いま社会事象についてコンピュータとコミュニケーションを中心として情報システムの高度化に挑戦している人々、また情報化せられた諸資料を利用して問題解明にたずさわっている人々にとって、最も肝要なのは、情報化されていないもの、従ってまた情報システム化に至っていないものへの配慮、情報化を対象とする社会事象の原点にさかのぼって、つねに実態理解の努力を怠ることができないということであろう。実態に即して、きわめて泥くさいとりくみの必要な段階のあることを看過できないということになると思う。

いまフィーリング時代といわれることも、このことと無関係でないように思う。現代を情報化社会といい、それは知的創造の社会を指向しているともいわれるなかで、論理より感覚で判断していくことを特徴づけるようなフィーリングという用語が目立っているのである。常識のワクのなかで判断できなくなったいまの問題意識のうけとめ方と思われる。論理的に展開できない問題意識の提示ということであるようである。いいかえると、激動する環境条件と人間とのかかわりあいにおける情報化の限界ということであろうか。社会事象に関する限り、つねに実態にたちかえって、いまだ情報化されえない分野のきわめて多いことへの謙虚さのなかで、その情報化の工夫につとめるという姿勢が求められているといえよう。

† 神戸大学経済経営研究所教授、本学会関西支部長